

尊厳についての 哲学的考察

於) 東洋大学 2019年5月26日
片山善博

尊厳概念をめぐる議論(1)

・哲学史のなかで「尊厳」概念はあまり論じられていない。例えば、岩波書店の『哲学事典』には「尊厳」という項目はない。カントが論じた程度で、他の多くの哲学者は主題的に取り上げていない。

・しかし「尊厳」は、第二次大戦後「世界人権宣言」、「ドイツ基本法」などの重要な概念として明記される。近年は、出生前診断、遺伝子研究、尊厳死などに関する生命倫理の中で論じられ、尊厳概念の吟味も行われている。

尊厳概念をめぐる議論(2)

・昨今、岩波書店の『思想』で「尊厳」についての特集が組まれるなど、尊厳のアクチュアリティに目を向けた研究も:加藤泰史は、例として、「民主主義」「多元主義」「寛容」「多様性」「脳死・臓器移植」「iPS細胞研究」「生命の尊厳」「被造物の尊厳」を挙げている(加藤,2017,7)

・ただし尊厳概念の十分な根拠づけについては、今後の課題。カント的な枠組み(人格論)をどう理解するか。あるいはこれとは異なるアプローチの可能性は

現代ドイツの哲学者 クヴァンテの指摘

・人間の尊厳の根拠づけの二つの方法

①外在的根拠づけ→神学的方法:神によって与えられた神聖性として

②内在的根拠づけ→人間存在の有する特別な能力(例えば自律的に生を営むことができる能力)として→「人格」として生を営むことができるという理念→相互尊重を要求し、正当化する

特にドイツ観念論において尊厳は「人格」論として論じられてきた(クヴァンテもその系譜)

人格とは

・人格とは(ラテン語のpersona、仮面や仮面をつけ演技する役者の役割のこと)

・ペルソナ(仮面)→さまざまな役割と結びつけられる

・人は生活する中で、さまざまな場面で、ある役割を重視し、ある役割を軽視する(対他的側面)

・しかし、役割を超える、つまり役割に意味的な統一を与えるものが求められる(同一性としての人格)

人格の二面性(カント→ヘーゲル)

①役割→感性界(動物的)→依存

②同一性→叡智界(道徳的)→自立

カントの尊厳概念

・カントは、感性界にありながら叡智界を実現しよう(欲望にとられながらも道徳的に生きよう)とする点(自律)に人間の尊厳(つまり人格性)を見いだす。なぜなら人間は理性的存在者であるから。

・「人格は、感性界にぞくするものでありながら、じぶん自身の人格性に服従しているのだから、それは人格が同時に叡智界に所属するかぎりにおいてのことである。』『実践理性批判(1788)』(カント,2013,234)

・「自律こそが、かくして人間的本性、ならびにいっさいの理性的本性に属する尊厳の根拠なのである。』『倫理の形而上学の基礎づけ(1785)』(カント,2013,175)

尊厳は人格の内なる人間性にある

・人間性とは、自律(普遍的な自己立法の能力)のこと

・なぜ自律にみるかというと 自然の王国にありながら目的の王国を樹立しようとすることができるから 目的の王国は、互いの人格をたんなる手段として取り扱わず、常に同時に目的として取り扱うよう、自らの意志で行為する構成員によって形成される(つまり人格は目的の王国を担い、それを実現する共同性の原理をそなえている)

・「人間の尊厳は、まさにこの普遍的に立法する能力のうちにある。」同上(カント,2013,187)

目的の王国(引用)

・目的の王国についての引用

・「理性的存在者はことごとく法則の元に立ち、その法則が「理性的存在者のおのおのが、じぶん自身とあらゆる他者たちとを、けつしてたんに手段としてのみではなく、つねに同時に目的自体そのものとして取りあつかうべきである」と命じるからである。そのことによって生じるのはいっぼうで、共同的で客観的な法則をつじた理性的存在者の体系的結合である。すなわち一箇の王国が生じるのである。」『実践理性批判』(カント,2013,166)

・置き換え不可能なものとしての尊厳

・「目的の王国にあって、すべてのものは価格を有するか、尊厳をそなえている。価格を有するものは、そのものの代わりにまた、等価物としての或る他のものが置きかえられることができる。これに対して、あらゆる価格を超えており、かくてまたいかなる等価物もゆるさないものこそが、尊厳をそなえているのである。」『倫理の形而上学の基礎づけ』(カント,2013,171)

共同性(倫理)を成立させる人間性は尊厳をもつ

・目的の王国の構成員たる人格は、尊厳を持つ

・「さて道徳性とは、そのもとでだけ理性的存在者が目的自体そのものでありうる条件である。なぜなら、ひとり道徳性によってのみ理性的存在者は、目的の王国において立法する構成員であることが可能となるからである。かくして倫理性と、倫理性をそなえることができるかぎりでの人間性は、それだけが尊厳を有することができるものなのだ。」同上(カント,2013,171)

カントの人格論の意義と限界(1)

・人格の内に、互いの人格を相互尊重すべきという共同性の理念(道徳性)を見いだした点。つまり人格に道徳性としての尊厳をみとめなければ、共同社会は共同社会として成立しない

・しかし、尊厳は、具体的な人間関係のあるべき道徳的・倫理的な人間性を示すのみ→具体的な人間関係に内在した人間性になっていない→抽象性)

・つまり、尊厳は、人間関係のあるべき理念とはなり得ても、人間関係の具体的な場面において考察されていない

・さらに、人格を、普遍的な立法ができる個人の能力(理性的存在者)に還元している

カントの人格論の意義と限界(2)

・ヘーゲルによる批判→カントは、動物的なものをの超えようとする普遍的自己立法に尊厳の根拠を見、そして他者に開かれたものであるが自己立法できる個人の理性の可能性や能力を前提とする。これに対してヘーゲルは、そうした可能性や能力を前提として道徳や倫理を考えてしまうと、それが実現する道徳や倫理は形式的・抽象的になってしまうと批判。各人の可能性や能力は、共同性のなかで涵養される。

・各人に、人格の普遍的な立法可能な能力(理性的存在者)を想定することは、多様な存在を認めていこうとする現代においてはそのまま通用しない(この点はカント研究者のあいだでも議論されている。また、現代にも通用するようにカントの尊厳概念を再解釈する試みも)

カントの人格論の意義と限界(3)

・カントとは異なるアプローチとして、承認論の枠組みで尊厳を考える立場もある

→「尊厳を相互承認論の枠組みの中で基礎づけるのは全く無益である。」(加藤,2019,24)

なぜなら「ある人に関して承認が欠如している場合にはその人には尊厳が付与されない」(同上)

ただし、ここで想定されている承認論は、ホネット的な承認論(承認されることを重視した承認論:ヘーゲルの承認論のある一面を強調したもの)

人格にとって、内在性が先か、承認が先か

・ヘーゲルは、内在性と承認は同時に成り立つと考える。人格の内在性は、相互承認によって成り立つし、相互承認は、人格の内在性によって成り立つ。(『精神現象学』「自己意識」章の「承認の概念」であげている、磁石のS極とN極の例)人格は、それ自体であると同時に、他者の他者としてある。つまり人格には、自立と依存が同居している。

・人格とは、この自立と依存の矛盾に耐えること、この解決には、精神や理性的なもの(社会においては社会的承認や社会政策)の力が必要

ヘーゲルの承認論

・人格は、ホネットのように承認をめぐる闘争によって認められるものではなく、そもそも相互承認(社会的承認)によって成り立っている。

・クヴァンテ(1962-)のヘーゲル評価

「人格が人格であるうえで構成的である社会的構造を明らかにした。」(クヴァンテ,2017,172)

「人間にとって自律と幸福の二つは、社会的共同体のなかでのみ、理性的な社会制度の枠組みのなかでのみ実現されるものであり、そのことによってこの二つはある程度の期間にわたって保証されるのである。」(クヴァンテ,2017,173)

『精神現象学(1807)』の承認論

・人格は、自己と他者との相互承認(より根源的には社会的承認)によって成り立つ。原理的に自己と他者は、排除し合いながらも密接不可分の関係にある(磁石のS極とN極のようなもの)→他者との依存関係抜きに自己の自立はない(自己は他者に依存しながら自立的であろうとする)→自己の同一性(人格)は本質的に他者性を保持している。

・共同性から切り離れた人格は、形式的・抽象的なものに過ぎない。したがって、人格のある種の能力もあらかじめ個人に内在する能力ではない。その能力も共同体のなかで成り立つものだから。人格の内在性は、具体的な他者との関係の中で具体化される。

『精神現象学』の承認論

・承認をめぐる闘争の位置づけ

・しかし、現実には承認をめぐる闘争によって、承認される人々と承認されない人々の分断、あるいは社会規範に自らを適合させることのできるものによる適合できない人々の排除がおこる。しかし他者を否定しつつけることは、自分の存在根拠を失うことを意味し、逆に他者をそのまま認めることも自分の立つ価値を否定することを意味する→こうした矛盾に向き合うなかで、両者に価値意識に転換がおこる。互いに矛盾していることを認め合う相互承認によって既存の社会規範が問い直される→ヘーゲルはこの矛盾を抱えたものを「人格」にみる。

『法哲学講義』の人格論(1)

・人格を成り立たせている二つの契機

- ①依存、有限、個別性、規定されたもの、対他性
- ②自立、無限、普遍性、規定されないもの、対自性

→人格はこの二つの矛盾した契機から成り立ち、それを自覚するところに人間の完全な価値がある

・「私はあらゆる側面から依存的である。しかしまさにそのようにして私は私固有のものである。私は私を自我として認識することによって、私は無限であり普遍的である。私がこの矛盾するものを分離したまま保持する力であることが、人格性の概念である。私はこの絶対的な結び目である。人間が自分を人格として知るところに人間の全き価値はある。」(Hegel,GW26,15-16)

『法哲学講義』の人格論(2)

・人格は、矛盾をはらんでいる

・「人格そのもののうちに、無限なものに有限なものとの統一がある。人格のうちにはこうした途方も無い矛盾が存在する。そしてこうした矛盾に耐え得ることが人格の高貴さである。というのは自然的なものは矛盾を自分のうちに保持できない。しかしまさに概念は対立の統一である。人格は、こうした単純なもの、自己の元にあるものであり、絶対的な運動である。というのも矛盾は人格の中にあるからである。矛盾は絶えず解消し、絶えず存在する。人格とは、自由である、無限であるという規定であると同時に単に有限なもの、このもの、個別的なもの、規定されたものである。」(Hegel,GW26,809)

『法哲学講義』の人格論(3)

・人格の矛盾の解消は、精神の力による

・「全く反対の極を結びつけるのはまさに精神である。精神は途方もないもので、いわゆる健全な知性には狂ったものと見えるが、全く正反対のものを結びつける。そのように精神の力は偉大なのだ。私は石ころのように力なくはかない存在であるが、このような弱さにおいて対象を無限に自由なものとして自覚している。人格はこのように高貴なものであるが、まだ抽象的である。というのも、私は自分をこのひととして知るに過ぎず、このひととして規定されているに過ぎず、私の自由というもう一つの内容にふさわしくない。この矛盾はなるほど私に担われているが、解消されることはない。両者の調和は、理性においてははじめて可能である。」(Hegel, GW26, 1113-1114)

ヘーゲルの人格論の意義

・さまざまな他者との関わり(役割)は常に人格の同一性を否定することになるが、この人格の同一性がなければ、さまざまな関わりもまた成立しない(人格概念の二重性の復活)

・有限性と無限性、<規定されていること>と<この状態を否定すること>との矛盾に耐えること→ここに人格の高貴さがある

・しかしこの矛盾を解消することは個人の力ではできない→精神や理性的なものの力が必要→人格そのものは抽象的なものにすぎない。人格は、共同(ヘーゲルの精神とは共同的なものである)の力を用いて具体化される。『法哲学講義』では、これが福祉政策や国家として提示されている。

ヘーゲルの人格概念の限界？

・ヘーゲルも、人格を自己意識や個人(といっても他者との関係性で成り立つのだが)にみており、人格の具体化においても、理性的なものを重視している。

・特に20世紀(二度の大戦)以降、こうした自己意識や理性に対する不信が生じる

・より根源的な「尊厳」概念の根拠を問う必要性？自己より他者の存在を重視した「尊厳」概念を考えるべきか(例えばレヴィナス)

岡村重夫の尊厳への指摘

・主体的人間性が人格の尊厳の哲学的基礎

・「われわれは、(中略)人間存在の個人的契機を主体的人間性として再評価し、その実現を援助する社会制度ないし社会的努力として、「現代の社会福祉」を位置づけるものである。それは、この個人的契機すなわち主体的人間性は、人格の尊厳性の哲学的基礎であるからであり、これを否定する共同体を否定し返す個人を援助する、新しい社会制度を要求せねばならないからである。」(岡村、1993,5)

人格についての岡村とヘーゲルの親和性

・岡村重夫の「主体的人間性」の考え方は、和辻哲郎の『倫理学』や『人間の学としての倫理学』の間柄として人間を捉えるという考え方に依拠したものである。ただし、岡村は人間存在の間柄(関係)として捉えつつも、和辻より個の契機(人格)を重視している。

・ヘーゲルの人格論との親和性:岡村は、カント的な道徳的自律ではなく、自らを否定(規定と言い換えても良い)して行く共同体を否定していく主体のあり方に人格をみ、そこに尊厳があるとす。尊厳を守るとは、人格が現実にあるこの矛盾を乗り越えていけるよう、援助する必要がある(ソーシャルワークの援助や社会政策)

レヴィナスの視点

・ドイツ観念論の議論を受け継ぎながらも、理性的なものの疾しさにめを向け、自他の相互性に還元されない、自他の非相互性(なぜなら自他の相互性を想定すると、他者は自己にとって了解可能な存在となるため)に根ざした、尊厳のあり方

・尊厳に意味を与えるのは他者のくみ尽くすことができない無限性

理性の疾しさ

・レヴィナスによる「理性の疾しさ」の指摘

・「西欧の伝統と思考の叡知に即して言うなら、諸々の〈個体〉は、存在しようとする努力という排除的な暴力および他の〈個体〉との敵対という排除的な暴力を、知によって打ち立てられる平和のうちで乗り越えていくのであり、この知の真理を確立するのが〈理性〉なのである。(中略)しかし、ヨーロッパにとって本質的な時代であり、総決算の時でもあるこの現代においても、ヨーロッパの意識は平和のうちにはない。数千年にわたる栄光ある〈理性〉、知という勝ち誇る〈理性〉の果ての疾しさ。』『われわれのあいだで』(レヴィナス,2015,263-265)

他者(唯一者)の尊厳

・「〈無関心ではありえないこと〉において、他者の差異はひとつの類に属する数多くの個体同士の不十分な形式的他性ではなく、いかなる類とも無関係で、あらゆる類を超越する唯一者の他性と化す。このとき超越とは単に内在性のしくじりではなく、近さとしての社会的なものが有する還元不可能な卓越性であり、まさに平和である。(中略)平和としての〈無関心ではありえないこと〉を、なんらかの好奇心が失われた結果生じた中立と解してはならない。それは責任という「他者のために」なのである。責任に答えるものとしての応答—これが最初の言語なのだ。これが原初の善性なのだ。すでに憎悪すら、配慮するというそのことによってこの善性を前提としている。肉欲なき愛。かかる愛のうちで人間の権利が、愛されるものの権利が、すなわち唯一者の尊厳が意味を獲得する。』『われわれのあいだで(1991)』(レヴィナス,2015,268-9)

自己の〈他者性〉を見つめ続けること

・人格の相互的な関係より根源的な、固有の人間関係がどのようにして成り立つのか

・自己の内なる他者性(自己の了解する他者の像を凌駕し超出する他者の現れ方:これをレヴィナスは「顔」と名付ける)を求め続けることの重要性

・無関心ではいられない他者への関わりによって、倫理は生まれる(他者への応答によって、私の責任は生まれる→私は本当の意味で自由になる)

同一性の暴力とどう向き合うか

・同一性の暴力 承認されたものの暴力→他者の排除

・ヘーゲルは、人格は同一性と非同一性(他者性)との矛盾をもち、矛盾を乗り越えようとする点に人格の高貴さをみてとるが、レヴィナスからすると、ヘーゲルの他者は、自他の相互性、自己の同一性へと回収される

・同一性から倫理が始まるのではない(他者の唯一性、無限性から始まる)

・他者を了解可能なものとする同一性の暴力(自己の同一性の側に尊厳を見るのではなく、無限の他者の側に尊厳を見る、あるいは同一性の根拠を他者に見る)

他者への責任と尊厳(引用)

・「みずからを表出する存在は、自らを押しとおしてくる。とはいえそれはまさに、その悲惨と裸形によって—顔によって—私に訴えることによってであって、私はその訴えに対して耳を塞ぐことはできない。だからこそ、表出という形で自らを押しとおす存在は私の自由を制限するのではなく、増進させる。私のうちに善さを生み出すことで、私の自由を増進させるのである。』『全体性と無限(1961)』(レヴィナス,2006,44-45)

・「顔のうちで現前する存在は高さの次元から、超越の次元から到来する。当の存在はそこで異邦人として現前しうるけれども、障害物や敵対者のように、私に対立することがない。他方、過剰なものとして自己を定立するのは、〈私〉としての私の定立が他者の本質的な悲惨に応答しうることであり、じぶんでそのための資源を見出すことであるからだ。その超越において私を支配する〈他者〉は、同時に異邦人、寡婦、孤児であり、かれらに対して私は義務を負っているのである』同上(レヴィナス,2006,79)

尊厳概念の有効性

・20世紀初頭の人間の選別(生きるに値しない生命)、優生思想の蔓延

→アウシュビッツ、パーソン論の登場、また市場原理主義社会における能力主義の浸透

・日常的な場面で排除された人々の尊厳(人格あるいは唯一性)に目を向けること→他者とともに社会の支配的な価値観や規範を再考すること、誰をも排除せず傷つけない、各人の自立に基づく共同体を形成すること。

参考文献

- *Gesammelte Werke*Bd.9(Hegel, G.W.F./Felix Meiner Verlag/1980)
- *Gesammelte Werke*Bd.26(1-3),(Hegel, G.W.F./Felix Meiner Verlag/2013-2015)
- 「地域福祉の思想」『大阪市社会福祉研究』第16号(岡村重夫/大阪市社会福祉協議会編/1993年)
- 「思想の言葉」「尊厳」概念のアクチュアリティ」『思想』No.1114(加藤泰史/岩波書店/2017)
- 「公共と尊厳」『思想』No.1139(加藤泰史/岩波書店/2019)
- 『実践理性批判 倫理の形而上学の基礎づけ』(カント-I/熊野純彦訳/作品社/2013年)
- 『人間の尊厳と人格の自律』(クヴァンテ.M/加藤泰史監訳/法政大学出版局/2015年)
- 「尊厳と多元主義—今日におけるヘーゲル哲学のアクチュアリティとその限界」『思想』No.1114(クヴァンテ.M/瀬川真吾訳/岩波書店/2017)
- 『われわれのあいだで(新装版)』(レヴィナス.E/合田、谷口訳/法政大学出版局/2015年)
- 『全体性と無限(上)(下)』(レヴィナス.E/岩波書店/熊野純彦訳/2005-2006年)